



三日目追加 HO
スマレ





「『毒なんて入れてないですよ』、か」

去り際に彼女が放った言葉は、思いのほか僕に突き刺さった。

孤児院にいたときは市民から見下され、屋敷にいたときは人と思われてないような扱いを受けて。

今まで僕に良くしてくれる人なんてほとんどいなかった。

ただの善意など、僕にとって珍しいものでしかない。

けれども、その善意を当然のように与えてくる人間もいるのだと、思い知ったのだ。

腕の力だけで扉へ向かう。

隙間から上掛け^{うわが}とお湯、トレーを引き入れた。

今日も不揃いな野菜が入ったスープだったが、香り立つスープが食欲を刺激する。

僕はそれにはじめて口をつけて、飲み込んだ。

スープのあたたかさが身に染みていき、鼻の奥がツンとして――。



けっしておいしいとは言えない味だが、やさしい味だとも思った。

やさしい味のあたたかいスープ。

たったそれだけのことなのに、どうしてか、感情がかき乱される。

口へ運ぶごとに涙がこぼれていった。





スープをすべて食べ終えたあとも気持ちがぐちゃぐちゃで、それをぶつけるかのようにひたすらに絵を描いた。部屋には抽象的な絵が何枚も散乱していく。そうして、満足いくころには睡魔が訪れて、そのまま崩れるように眠ってしまったのだった。

◆

孤児院にいる僕の隣には、ジーナがいる。僕たちはボロボロの絵本を読んでいた。

「流れ星に願い事をすると叶うんだって」

「お願い事かあ。いろんなことを知りたいから学校ってところに行きたいな。スマレは？」

「僕は有名な画家になりたい」

「本当にスマレは絵のことばかりだね。でも、スマレの絵は素敵だからなあ」

「そう、かな」


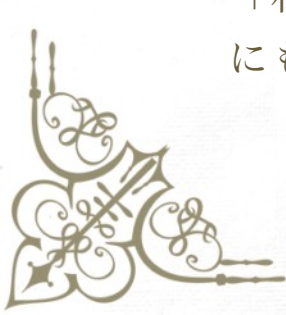
「うん！ 流れ星に願わなくたって、スマレだったら絶対画家になれるよ」



「ジーナだって、賢いんだから良い家に引き取ってもらえるよ」

「そうかなあ、そうだといいな。そのときはスマレも一緒に引き取ってもらえるようにお願いするね」

「僕はいいよ」

「私はいや。スマレも裕福な家に引き取ってもらって、なにも気にせずにいっぱいいっぱい絵を描くの！」





「おせっかいだな、ジーナは」
「それが私のいいところ、でしょ？」


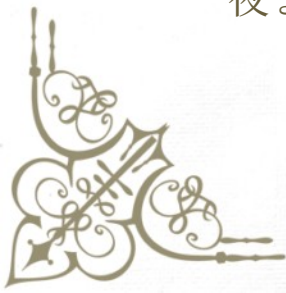
そう言って笑うジーナは、太陽のようだった。



目を覚ました。
懐かしい思い出を見た気がする。
僕は筆を持ち、紙に向かった。
手は自然と、笑顔のジーナを描いていく。
もう本人に見てもらえないけど、せめて、絵の中では笑っ
ていてほしい。
そんな願いだけが駆け巡っていた。

描き終わるころにはお腹が空いていたので、トレーに載っ
ていたパンと果物を食べた。
今、何時ぐらいだろうか。
昨晚降りはじめた雨は豪雨となっていたので、日の位置を
確認することができない。
けれども、随分と長く、よく眠れたような気がした。

冷えてしまった水で体を拭く。
足を拭いたとき、けがの治りが早いことに気がついた。
食事を摂って、よく眠ったからだろうか……。
夜までには治りそうな速度だ。





空のトレーと水とタオルを扉の向こう側に置いた。
そのあとはまた筆を持ち、窓から見える雨模様を描いた。
描きたいときに描きたいものが描けること。
生まれてからはじめて、自由というものを感じられた気がする。
心を感じるままに絵を描き続けていると、雨音に交じり、
足音が聞こえてきた。

